

2025 年度愛知県環境調査センター研究発表会 発表概要

日 時：2026 年 3 月 3 日（火）午後 1 時 30 分 開会

アルゼンチンアリの季節適応を考慮した防除について（13:40～14:00）

特定外来生物のアルゼンチンアリは、愛知県内では 2005 年に初めて侵入が確認され、定着地では、生態系や生活環境に影響を及ぼしている。アルゼンチンアリが侵略的外来生物たる大きな理由に「脅威の繁殖力」が挙げられる。

アルゼンチンアリの分布域及び個体数を減退させ、根絶を目指すため、アルゼンチンアリのライフサイクルの季節適応を利用した防除を 2023 年の冬季から春季にかけて試行し、2024 年の冬季から本格導入したので、その効果について報告する。

三河湾における栄養塩類管理施策の衛星観測評価に関する試みについて（14:00～14:15）

水質の保全と「豊かな海」の両立に向けて、本県では三河湾に排出水を放流する矢作川浄化センター及び豊川浄化センターにおいて、窒素・りん濃度の増加運転を行う社会実験を行ってきた。

その時期における栄養塩類による影響を確認するにあたっては、定点において実施されているクロロフィル a 濃度のモニタリング調査結果が有用であるが、近年における衛星データの普及状況を踏まえ面的な把握を行うことも効果的と考えられる。

そこで本研究では、衛星 GCOM-C(しきさい)により得られたクロロフィル a の月次データ(2018～2025 年)を用いて、2022 年度以降行われている社会実験がクロロフィル a 濃度に与える影響について解析を行った。

愛知県の河川水における化学物質のスクリーニング調査について（14:15～14:30）

現在流通している化学物質は工業的に生産されているものだけで数万種に及ぶといわれ、全国有数の工業県である本県はその使用量が多く、大規模災害時に工業地域で被害が発生した場合、様々な化学物質が同時に流出されることが懸念される。

これらの化学物質を測定するためには、それぞれの標準物質の入手、検量線の作成等、多大な労力、時間が必要であることから、本県では検量線を作成することなく、多くの化学物質を同時に同定・定量できる全自動同定定量システム（AIQS）を活用したスクリーニング手法を検討している。

災害時に流出した化学物質による異常の有無を正しく評価するためには、平時の状況を把握する必要があり、今回、愛知県内の 8 河川と油ヶ淵において、AIQS を活用し

た GC/MS によるスクリーニング分析を実施し、化学物質の存在状態を確認したので報告する。

大気汚染常時監視測定局に係るオゾン自動測定機の校正状況について（14:45～15:00）

愛知県は県内各地に大気汚染常時監視測定局を設け、オゾン自動測定機において光化学オキシダント濃度の測定を行っている。

2023 年度に光化学オキシダント濃度の測定について定めている JIS 規格の追補が行われたことにより、光化学オキシダント濃度の測定値が、従前の測定値よりも約 1.28% 増加すると環境省より示された。

そこで本県の測定機において、上述の JIS 規格の追補に伴う校正を実施したことから、その校正状況について報告する。

排出ガス中の酸化エチレン測定の課題と標準ガスを用いた試料保存性の検討状況について（15:00～15:20）

大気汚染防止法の優先取組物質である酸化エチレン（エチレンオキシド）は、2018 年に発がん性に関する有害性評価値が示されるとともに、2022 年に排出ガス中の酸化エチレンの暫定測定方法（以下「暫定測定方法」という。）や事業者による酸化エチレンの自主管理促進のための指針が公表されるなど、発生源対策が進みつつある。

当センターでは、従来から大気試料については有害大気汚染物質等の常時監視としての測定実績がある。しかし、暫定測定方法に示された測定方法とは異なる部分もある。そこで、排出ガス中の酸化エチレン測定に関する課題を整理するとともに、標準ガスを用いて試料の保存性について検討したので、報告する。

中部国際空港周辺の短期調査地点における航空機騒音の新旧評価指標の比較検討について（15:20～15:45）

航空機騒音に係る環境基準が 2007 年に改正され、騒音の評価指標が WECPNL（加重等価平均感覚騒音レベル）から L_{den} （時間帯補正等価騒音レベル）に移行し、新しい環境基準は 2013 年 4 月に施行された。新旧環境基準の値の差は理論上概ね 13 になるとされているが、実測値ではこの値からのずれが見られる。

県営名古屋空港周辺の調査地点での測定結果については、騒音継続時間を 20 秒と仮定している WECPNL の算出過程で実測の継続時間による補正を行うことにより、新旧評価指標の差は 13 に近づくことが報告されている。そこで、中部国際空港周辺の調査地点での測定結果についても同様の継続時間補正を適用して、新旧評価指標の比較検討を行ったので、この結果を報告する。